

「スポーツは身近なもの」

生涯スポーツ
振興委員会委員長

川合 麻美



◎青少年時代のスポーツとの関わりについて お聞かせください。

父親が健民少年団の分団長だった影響もあり、小学校5年生の時に健民少年団に入団してから高校生まで所属していました。その後、期間は空きますが、指導者としても関わっています。

健民少年団の活動では、規律訓練やハイキング、スケートのほか、今では考えられませんが小学校で宿泊するなど、思い出がたくさんありすぎて、健民少年団は青春そのものです。

また、活動中は中・高校生から小学生までが一緒のグループとなり団体行動をするのが基本で、上下関係の厳しさや下級生の子のお世話などをしていたため、人間関係のいい勉強をさせていただき、現在の社会人人生でも生かされています。一緒に活動した仲間は、今でも兄弟、家族みたいな親しい関係です。

◎現在行っているスポーツはありますか。

ゴルフが好きなので、月2回ぐらいコースに出てプレーを楽しんでいます。

また、スキューバダイビングを趣味で楽しんでいます。ライセンスを25年ぐらい前に取得し、今はコロナ禍のため自粛していますが、毎年1回ほど潜りに行っています。沖縄の宮古島などに行っていますが、海の中はとってもきれいで、別世界にいるみたいです。あの体験はスキューバダイビングでしかできませんね。

◎これまでに一番印象に残っていることは何ですか。

ドイツの方と奇跡的な再会をしたことです。経緯としては、日独スポーツ少年団交流事業で20歳の時にドイツに行き、民泊先のドリスと言う女の子と仲良くなりました。帰国後も手紙を互いに送りあい交流を深めていましたが、時間の経過とともに交流は無くなっていきました。その後、時間が経過し、大垣市体育連盟の日独交流事業で指導者として35年ぶりにドイツに行きました。その際の通訳の方（ドイツ在住）に、ドリスと言う女の子と仲が良かったことを話しました。すると、通訳の方の知人で名前も特徴も同じ人がいるとのことで、まさかと思い、当時の私が教えた特徴的

な日本語（「コーラの自販機はどこですか？」）のことを話すと、以前にドリスからその日本語を聞いたことがあることが分かり、同一人物だと判明しました。その後、派遣期間中に会う機会を通訳の方に作ってもらい35年ぶりに奇跡の再会をしました。

まさか再会できるとは思っていなかったのも、とても印象に残っています。

◎コロナ禍での大垣市のスポーツ振興について お考えなどありますか。

新型コロナウイルスの影響で、OGAKI スポーツフェスティバルなどのイベントが開催できていないため、寂しいです。コロナが蔓延するのも困りますが、違った形でのイベント開催が出来る方法はあると思います。このような時代だからこそ、感染症対策を講じてよりシンプルに実施することが大切だと思います。例えばラジオ体操の正しいやり方を学ぶことなど、シンプルなイベントでもいいので、多くの人が集まれる機会をつくる必要があると思います。

◎川合委員長にとってスポーツとは・・・

スポーツは、「構えるものではなく自然にできるもの。」だと考えており、この道具がないからできないとか、スポーツする服装では無いからやらないとかではなく、とりあえず、なんでもいいからやってみることが大切ですし、スポーツはそれぐらい『身近なもの』にならないといけないと思います。もちろん、競技スポーツは素晴らしいですし、スポーツをする環境も大切です。しかし、私たち一般人は、気負わずに単純に楽しむことや、下手だからやらないのではなく、とにかくやってみることが大切だと思います。

インタビュアー：スポーツ広報委員会 委員長 田中